景勝八木ケ鼻ふもとに『松坨』の碑

「元治甲子」「七十翁祥」が添えられる

「松坨」の碑のなぞを解き明かした八幡公園の「佐藤淳庵碑」

有史以前から人々を引きつけてやまない景勝八木ケ鼻のふもとに、「松坨（しょうだ）」と刻まれた碑がある。なぞを解くカギは、遠く八幡公園の「佐藤淳庵碑」。血縁はなくとも深く結ばれた親子愛が、二基の碑となって今に残っている。

八木ケ鼻は約六、七百万年前の海底火山活動でできた海底熔岩ドームの中心部で、地質的にも非常に珍しい。五十嵐川河畔にただ一つそびえる絶壁の威容は、約二万年前の旧石器時代から、人々を引きつけている。

その八木ケ鼻の真下、旧国道沿いで、絶壁に向かい合わせにたたずむ「松坨」の碑。自然の岩の表面を削り、縦七十㌢、横九十㌢ほどの平らな面を作り、大きく「松坨」と刻まれ、「元治甲子」「七十翁祥」と添えられている。

「坨」は蛇のように曲がりくねった枝や幹の形状を示す言葉で、八木ケ鼻の崖上に生えている松の姿を指しており、元治元年（一八六四年）に七十歳の人が刻んだ。

佐藤玄厚に医術を学び 玄厚は死に際、2児を淳庵に託した

碑から読み取れるのはこの程度で、近くの北五百川、八木神社官司で三条市文化財保護審議会委員石澤功さん（七七）も「長い間、どういうものかと不思議でした」。

そのなぞを解くカギが八幡公園の桑山、村山半牧頌徳碑わきにひっそりとたたずむ「佐藤淳庵碑」。石澤さんは「八幡宮の藤崎宮司から三条市郷土史研究会編の『八幡公園のいしぶみ』を拝見させていただき、なぞが解けました」と言う。

同書によると、「佐藤淳庵碑」は五十嵐川産石を用い、高さは百十㌢、幅は六十㌢ほどの大きさ。

顕彰されている佐藤淳庵は寛政七年（一七九五年）、関川家に生まれ、本名は定祥。佐藤玄厚に師事して医術を学んだ。

師玄厚は死に際、幼い小雪と竜斎の養育を淳庵に託し、淳庵は自ら姓を佐藤と改め二児を養育、その後、小雪（本名・

淳庵は71歳で死去 2人は八幡宮に碑を建立

八木山（八木ケ鼻）の風景を愛し、号とした「松坨」を大書し、奥に口、の崖石へと刻ませたのが、元治元年。

二年後の慶応二年（一八六六年）九月二十七日、淳庵は七十一歳で死去。のこされた二人は義父をしのび、慶応四年（一八六八年）、碑を八幡宮境内に建立し、昭和三十九年秋、八幡公園の整備に伴い、現在地に移設された。

八木ケ鼻から下流に約二十㌔の八幡公園へとつながった親子の物語に、石澤さんは「本当の親子でもこうはできません。それが仲一生懸命に、子どもを育てたのでしょう。血のつながりはなくても、深く結ばれた親子の愛情を深く感じ、非常に感激しました」と話していた。

興）も江戸、大阪に出て医術、儒学を修め、淳庵を助けるとともに、家塾を開き、多数の師弟を教授。

淳庵は文政十一年（一八二八年）の三条地震で九死に一生を得、療養に努めつつ、書画をたしなんだ。

「松坨」の碑を示す石澤さん

村山半牧頌徳碑のわきに、ひっそりとたたずむ「佐藤淳庵碑」

八木ケ鼻と八幡宮を結ぶ親子の物語

2万年前の旧石器時代からの地質的にも珍しい八木ケ鼻の真下

カギは八幡公園の『佐藤淳庵碑』

深く結ばれた親子愛が2基の碑となって

八木ケ鼻の絶壁の真下に「松坨」の碑